

## 新学習指導要領で評価が変わる！

# 新学習指導要領における学習評価の進め方 (中学校 外国語科)



平成 24 年度から，中学校では新学習指導要領が全面実施となります。新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方については，平成 23 年 7 月に「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」が，国立教育政策研究所教育課程研究センターから示されているところです。この「学習評価の進め方」は，新学習指導要領に基づく学習評価を円滑に進めていくための手引きとして，佐賀県教育センターが作成したものです。各学校における新学習指導要領に基づいた指導と評価を推進していくためにお役立てください。

### (主な内容)

- 1 新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方とその具体
- 2 中学校外国語科における教科目標，評価の観点とその趣旨について
- 3 中学校外国語科における学習評価の進め方
- 4 中学校外国語科における学習評価事例
- 5 中学校外国語科における学習評価の進め方 Q & A



## 新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の基本的な考え方

新学習指導要領の下での学習評価については、児童生徒の「生きる力」の育成をめざし、児童生徒の一人一人の資質や能力をより確かに育むようにするため、目標に照らしてその実現状況をみる評価（目標に準拠した評価）を着実に実施し、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要です。併せて、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが求められています。

## 各学校における学習評価の進め方と留意点

各学校においては、評価規準を適切に設定するとともに、評価方法の工夫改善を進めること、評価結果について教師同士で検討すること、実践事例を着実に継承していくこと、授業研究等を通じ教師一人一人の力量の向上を図ること等に、校長のリーダーシップの下で、学校として組織的・計画的に取り組むことが必要です。また、年間指導計画を検討する際には、それぞれの単元（題材）において、観点別学習状況の評価に係る最適の時期や方法を観点ごとに整理することが重要です。このことが、評価すべき点を見落としていないかの確認や、必要以上に評価機会を設けることによる無駄を省き、効果的・効率的な学習評価を行うことにつながります。

## 新学習指導要領における学習評価の観点について

### (1) 従前と新学習指導要領における学習評価の観点

従前の観点	新学習指導要領における観点
「関心・意欲・態度」	「関心・意欲・態度」
「思考・判断」	「思考・判断・表現」
「技能・表現」	「技能」
「知識・理解」	「知識・理解」

### (2) 新学習指導要領における学習評価の観点的説明

#### 「関心・意欲・態度」

これまでと同様、各教科の学習に即した関心や意欲、学習への態度等を対象としたもので、その趣旨に変更はありません。

#### 「思考・判断・表現」

「表現」については、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、児童生徒の説明・論述・討論などの言語活動等を通じて評価することを意味しています。つまり、ここでいう「表現」とは、これまでの「技能・表現」で評価されていた「表現」ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて児童生徒がどのように表出しているかを内容としています。

#### 「技能」

従前において「技能・表現」として評価されていた「表現」も含む観点として設定されています。

#### 「知識・理解」

これまでと同様、各教科において習得した知識や重要な概念を習得しているかどうかを内容としたもので、その趣旨に変更はありません。

## 中学校 外国語科における教科目標，評価の観点及びその趣旨

### 1 教科目標

外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

これまでの理念を引き継いでおり，「実践的コミュニケーション能力」が「コミュニケーション能力」と変更された以外は，特に外国語科の教科目標に変更はありません。

### 2 評価の観点及びその趣旨

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
コミュニケーションに関心を持ち，積極的に言語活動を行い，コミュニケーションを図ろうとする。	外国語で話したり書いたりして，自分の考えなどを表現している。	外国語を聞いたり読んだりして，話し手や書き手の意向などを理解している。	外国語の学習を通して，言語やその運用についての知識を身に付けているとともに，その背景にある文化などを理解している。

#### 評価の観点がこれまでと変わったところは？

これまでの「表現の能力」及び「理解の能力」の観点は，「思考・判断・表現」及び「知識・理解」の用語との混乱を避けるため，外国語科独自の「表現」や「理解」の能力という意味での「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」に便宜上，変更されました。観点の趣旨そのものの根本的な変更を伴うものではありません。

### 3 学年別の評価の観点

外国語科においては，学習指導要領で3学年間を通じて目指すべき目標が示されており，学年別の目標や評価の観点は，各学校で作成する必要があります。内容のまとめりごとに評価規準を作成し，単元の目標や内容，学習活動を明確にして3学年間を見通した計画を立ててください。

### 4 内容のまとめり

ここでの「内容のまとめり」とは，学習指導要領に示す領域や内容項目等をそのまとめりごとに整理したもので，中学校外国語科においては，「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4つを内容のまとめりとしています。

## 中学校外国語科における学習評価の進め方

### 1 最初に何をすればいいの？

まず，年間指導計画を作成することから始めます。そのためには，学習指導要領に示されている3学年間を通じて目指すべき目標を踏まえて，学年別の目標を明確にしておかなければなりません。また，その目標が段階的になるように，担当者同士で検討し，共通理解しておく必要もあります。

次に、各学期、各単元の順に、目標や内容、学習活動を明確にして計画を立て、評価規準を設定します。このとき、国立教育政策研究所から公開されている「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(以下、参考資料と表記)に示されている「評価規準の設定例」を参考にするとよいでしょう。必要に応じて評価規準の設定例の記述を具体化したり、いくつかの設定例を参考に設定したりするなどの工夫が望まれます。

なお、異なる学年であっても同じ「評価規準の設定例」を活用することがあります。例えば、参考資料の『書くこと』の評価規準の設定例に示されている「外国語表現の能力(正確な表記)」にある「語句や表現、文法事項などの知識を活用して正しく書くことができる。」を各学年に対応させると、次のような評価規準の設定例が考えられます。

語句や表現、文法事項などの知識を活用して正しく書くことができる。(外国語表現の能力)

具体化

1年の1学期	<u>文頭の太文字や文末の終止符など文のきまりに注意して、自己紹介文を正しく書くことができる。</u>
2年の1学期	<u>現在形と過去形の動詞の形の違いを区別して、Eメールを正しく書くことができる。</u>
3年の2学期	<u>関係代名詞を用いて、有名人の紹介文を正しく書くことができる。</u>

「英文を書かせて評価する」という方法は同じですが、「評価規準の設定例」の中の「語句や表現、文法事項などの知識を活用して」の部分をもどのように捉えるかによって、下線部のように評価規準も異なります。1年の1学期の例のように、学習の初期段階では、文の基本的なきまりについての知識を活用する力を評価することになります。学習が更に進むと、2年生の1学期の例のように、過去形の知識を活用するだけでなく、現在形との動詞の形の違いを区別して正確に伝えることができるかどうかを評価対象とすることなどが考えられます。3年生の1学期の例も同様に、学習の進度に応じて活用する知識がより高度になります。なお、波線部のように単元に位置付ける学習活動を具体的に記すとよいでしょう。

## 2 具体的にどうやって設定するの？

それでは、参考資料の「評価規準の設定例」を活用した評価規準の設定の仕方について、以下の(1)(2)(3)の手順に沿って説明します。

### (1) 年間指導計画を基に単元の内容を確認する。

まず、年間の指導及び評価の流れを見通して作成された年間指導計画における単元の位置付けを確認します。ここで言う単元とは、教科書の一つの課(UnitやLessonなど)を意味します。単元の目標については、扱う題材内容や言語材料の特徴を踏まえ、表現や理解の能力に関わる事項を中心に設定されることが望ましいです。これは、学習指導要領において、外国語科の授業では、コミュニケーション活動を中心とした授業が期待されているからです。

次に、設定した目標をどの観点で評価するかについても確認しておく必要があります。例えば、比較的長い物語文を教材文として扱う単元では「理解の能力」、買い物の場面の対話文を教材文として扱う単元では「表現の能力」といったように、教材文の特徴なども踏まえて、指導して評価を行う観点を明確にしておく必要があります。なお、評価の観点の決定については、無理のない計画を立てることも必要です。例えば、「まとまりのある文章を読んで、自分の感想を書く」という表現と理解

の統合型の活動を行うのに適した単元において、「読むこと」と「書くこと」の技能の統合を図る指導は行うけれども、単元の目標は「感想を書くこと」に絞り込んで、「読むこと」については記録に残す評価の対象としないといったような計画が必要です。

(2) 単元の目標を設定する。

ある単元が、内容的にまとまりのある文章を書くことに適した単元だとしたときに、手紙文やEメールなどどのような形式で書くのか、友達やALTなど誰に対して書くのか、内容的にまとまりのある文章になるには何文程度で書かせるのが適切なのかなどを考えて目標を設定します。その際、学習指導要領の目標と内容及び生徒の実態、前単元までの学習状況等も踏まえて設定します。

例えば、次のような目標が考えられます。

【目標】自分の住んでいる町を来日するALTの家族に紹介するための紹介文を書く。

(3) 評価規準を設定する。

目標として「書くこと」を設定した場合、評価規準に盛り込むべき事項は次の2つです。

評価規準に盛り込むべき事項(国立教育政策研究所)

外国語表現の能力	自分の考えや気持ちなどを英語で正しく書くことができる。
	目的に応じて英語で適切に書くことができる。

は正確な筆記を評価するもので、は適切な筆記を評価するものです。過去形やto不定詞など新出文法事項を用いて自分の考えや気持ちを正しく書くことができるかなどについて評価する場合はを、ALTの家族からもらった手紙やEメールなどに対して、適切に返事を書くことができるかなどについて評価する場合はを選びます。この例では、特に新出文法の知識を用いるのではなく、紹介文を書くという場面なので、「評価規準に盛り込むべき事項」はを選択します。

評価規準の設定例(国立教育政策研究所)

目的に応じて英語で適切に書くことができる。	ア 場面や状況にふさわしい表現を用いて書くことができる。
	イ 感想や内容に対しての賛否に加えてその理由を書くことができる。
	ウ 内容的にまとまりのある文章を書くことができる。

次に、対応する「評価規準の設定例」のアからウを参考にして評価規準を決定します。例えば、「日本に一度も来たことがないALTの家族にも分かるように」紹介文を書く場合はアを、「ALTの家族を一日ドライブに連れていくなら唐津くんちがよいか佐賀インターナショナルバルーンフェスタがよいか」という質問に応えるような紹介文を書く場合はイを、「自分の住んでいる町のおすすめの観光地を1つ紹介して、どんな楽しみ方があるのかも伝える」といったような紹介文を書く場合はウを選びます。ここでは、ウを選択したとして、この設定例を参考に評価規準を設定します。まず、「自分の住んでいる町について」を加えて、書くテーマや対象を具体化します。次に「内容的にまとまりのある文章」を「内容的にまとまりのある紹介文」とします。

【設定した評価規準】  
自分の住んでいる町について、内容的にまとまりのある紹介文を書くことができる。

ここでいう「内容的にまとまりのある紹介文」については、実際に評価を行う際に「おおむね満足できる状況」(B)の目安を学校や生徒の実態に応じて設定しておく必要があります。例えば、「名所や祭りなど自分が住んでいる町の特徴やよさを一つ紹介して、そこでの楽しみ方を含めて5文程度の文章で紹介する。」のように、いくつかの具体的な評価ポイントを設定しておくといよいでしょう。

### 3 各観点の評価内容と評価するときの留意点は？

#### 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】の評価

この観点は、生徒がコミュニケーションに取り組む様子やコミュニケーションを継続させようとする努力の様子が見られるかどうかを評価します。

【留意点1】用いられている英語の正確さや適切さについては評価の対象としない。

コミュニケーションへの関心・意欲・態度を評価の対象とし、そこで用いられる表現に文法的に誤りがあるなどの運用上の能力は評価の対象としません。

例えば、「ペアワークにおいて、間違えることを恐れずに話している」という評価規準を設定した言語活動において、生徒が“What hobby are you?”と友達に質問している場合は、機会を見て、文法的に「誤りである」ということについての指導は行いますが、記録に残す評価は行いません。躊躇せず発話しようとしている態度を評価するよう留意してください。

【留意点2】ある程度長い区切りの中において、適切な頻度で多面的に評価する。

教師の観察による評価が多くなるため、各単元に1回は評価機会をもつように設定することが望ましいです。また、言語活動への積極的な取組だけでなく、「つなぎ言葉を用いる」などのコミュニケーションの継続という視点も評価する機会を設定したり、表現中心の活動の評価場面だけでなく、「理解できない部分や前後の文を反復して読むなど工夫して読み続けている」などのように理解中心の活動における評価規準を設定したりするなどして、適切な頻度で多面的に評価するよう留意してください。

【留意点3】言語活動やコミュニケーションへの関わりについて評価する。

挙手や発言の積極的な態度は「英語授業」への積極的な態度ではありますが、必ずしも「コミュニケーション」への積極的な態度とはいえません。授業中の挙手や発言などの回数や宿題をきちんとしているかどうかといったような表面的な状況のみで評価することがないよう留意してください。

#### 【外国語表現の能力】の評価

この観点は、自分の考えや気持ち、事実などを誤解なく相手に伝えることができるかどうかを「話すこと」「書くこと」の内容のまとまりごとに、「正確な発話、正確な筆記」と「適切な発話、適切な筆記」について評価します。

【留意点1】評価するポイントを事前に設定し、生徒と共通理解しておく。

簡単なスピーチや英作文を言語活動として行う前に、生徒に評価する視点を示したり、生徒と話し合って目標を設定したりするようにしてください。

例えば、「修学旅行の思い出」というテーマのスピーチを評価する場合に、事前に「適切な声量で話すことができる」「自分の考えや感想を加えて話すことができる」などのよいスピーチのポイントを生徒と話し合って設定しておくことなどが考えられます。なお、その際に、三単現のSの脱落が目立つスピーチだった場合、このことについては、「正確な発話」の視点を、次の言語活動を設定する際の評価のポイントにするなどの配慮を行うようにしてはどうでしょうか。

【留意点2】「話すこと」の評価機会を複数回に分けて位置付ける。

「書くこと」については、ノートやワークシートの記述を基に授業後に評価することができますが、「話すこと」については授業外での評価が難しいので、評価機会を複数回に分けるなどの工夫が必要です。

例えば、生徒たちが一斉にインタビュー活動をするときに、「この列の生徒は5分間の活動で必ず一度は先生のところにインタビューに来なさい。」という機会を作る方法などが考えられます。他にも評価機会を2時間に分けて設定したり、授業のはじめの10分に活動をする機会を4回続けて設定して全ての生徒を無理なく評価したりする方法も考えられます。その際に、回数を重ねるごとに生徒の習熟が図られることを踏まえて、評価をするなどの配慮が必要です。

#### 【外国語理解の能力】の評価

この観点は、相手の意向や具体的な内容など、相手が伝えようとすることを理解できるかどうか「聞くこと」「読むこと」の内容のまとまりごとに、「正確な聞き取り、正確な読み取り」と「適切な聞き取り、適切な読み取り」について評価します。

【留意点】「正確さ」と「適切さ」をバランスよく評価する機会を設定する。

「既習の語句や表現、文構造などの知識を活用し、表現された内容を正しく理解することができる」といった「正確さ」に加えて、表現された内容のテーマが何か、最も主張したいことは何かなどを理解する「適切さ」もバランスよく指導して評価する必要があります。

例えば、「飛行機の機内放送を聞き取る」という言語使用場面では、到着時刻や現地の天候など大切な部分を聞き取れるかどうかの評価のポイントであり、正しく日本語訳できるわけではありません。このように場面や状況に応じた聞き方や、目的に応じた読み方をして英語を理解することができるかどうかを評価する必要があります。

#### 【言語や文化についての知識・理解】の評価

この観点は、知識や理解がコミュニケーションを目的として言語を運用する支えになっているかどうかを評価します。この観点は「言語についての知識」と「文化についての理解」の2観点で評価します。

言語についての知識は、言語活動を行う中で、そこに用いられている強勢、イントネーション、文法事項など、英語の仕組みについての知識が身に付いているかどうかを評価します。

一方、文化についての理解は、家庭、学校や社会における日常生活や風俗習慣など、言語活動に必要な文化的背景について理解しているかどうかを評価します。

【留意点】文化についての理解は一般常識的な知識を問う内容ではない。

「文化についての理解」については、一般常識的な知識や百科事典のような内容ではなく、技能の運用で求められる、言語の背景にある文化に限って評価するなどの配慮が必要です。

例えば、「スピーチの形式(終わりに Thank you. を用いる等)の知識がある」「電子メールの書き方について理解している」のように、理解していないとコミュニケーションに支障を来すような文化的背景を評価の対象とすることに留意してください。

# 中学校外国語科における学習評価事例 1

## 一 単元全体を見通して、学習評価の進め方が分かる事例

事例1の単元は、日本にいる孫のベッキーのために、アメリカの中学校を紹介するナンシーのビデオづくりを通して、世界各地の時差や日本の中学校との違いを学習する単元です。休み時間の長さの違いや週末の過ごし方の違いなどについてインタビューする形式で内容が構成されているので、Who ~?、What time ~?、What language ~?、How long ~?、Which ~? など、疑問詞を用いて質問をする表現が多く用いられています。したがって、時差や学校生活のことを質問するときに必要な表現やその使い方について教科書を通して学び、実際に英語で質問ができる力を養います。具体的には、Who を用いた有名人当てクイズや、What subject や Which を用いたインタビュー活動など、身の回りの人や物事について、口頭で質問したり、紹介したりする活動を主な言語活動として位置付けます。

ここでは全6時間で単元を構成し、1単位時間に1つ~2つの評価規準を設定しています。

### 1 単元名 サンフランシスコの学校(New Horizon English Course)第1学年「話すこと」

### 2 単元の目標

- (1) 身の回りの人や物事について、口頭で質問する。
- (2) ペアワークにおいて、間違ふことを恐れずに話す。
- (3) who, what time, what+名詞, which を用いた文の構造を理解する。

・能力に関わる事項を中心に設定する。

### 3 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
ペア活動やクラス全体の活動において、間違ふことを恐れずに話している。	身の回りの人や物事について、口頭で質問したり、紹介したりすることができる。	/	疑問詞 who を用いた文の構造を理解している。 what+名詞で始まる文の構造を理解している。 Which..., A or B?の文の構造を理解している。

各観点の名称については、便宜上、次のようにア~エの記号で表記しています。(事例2においても同様)

- ・ コミュニケーションへの関心・意欲・態度 ア
- ・ 外国語表現の能力 イ
- ・ 外国語理解の能力 ウ
- ・ 言語や文化についての知識・理解 エ

### 4 単元の指導と評価の計画(全6時間)

実際の指導と評価においては、指導に生かすための評価(形成的評価)も当然含まれますが、ここでは観点別評価や評定につながる評価(総括的評価)に関わる部分を示しています。

時間	ねらい・学習活動	評価規準	評価方法( )とその進め方
1	本単元で身に付ける技能や理解する内容を知る。 ・warm-upとして、ALTが自分の出身中学校を紹介しているビデオレターを見て、分かったことを出し合う。 ・本単元で身に付ける技能や理解する内容を知る。		



	<p>疑問詞 who を用いた文の構造を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教科書本文(Part 1)を通して, who を用いた疑問文の使い方や応答の仕方について理解する。</li> <li>教科書本文から, 身の回りの人や物事について, 口頭で質問したり, 紹介したりすることができる表現を探す。</li> </ul>	エの	<p>後日ペーパーテスト</p> <p>教科書本文の what と who の形・意味・用法を区別して理解しているかどうかを観察して, 指導を行います。記録に残す評価は単元終了後のペーパーテストで行います。</p>
	<p>身の回りの人や物事について, 口頭で質問したり, 紹介したりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グループで有名人当てクイズを行い, 生徒同士で自分が知らない人の名前をたずねたり, 知っている人を紹介したりする。</li> </ul>	アの	<p>活動の観察</p> <p>クラス全体のうちおおよそ半分のグループについて評価します。躊躇せず発話しようという姿が見られれば, 「おおむね満足できる」状況(B)と判断します。ここでは, 特に「十分満足できる」状況(A)と「努力を要する」状況(C)の生徒の把握に努め, 努力を要する状況の生徒には適切な指導を行います。</p>
	<p>「十分満足できる状況」(A)と判断する例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>不自然な沈黙がなく, 友達からの質問にも躊躇せず答えている。</li> <li>“ I don t know. Hint, please. ” など積極的に関わっている。</li> </ul> <p>「努力を要する状況」(C)と判断する例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>不自然な沈黙があったり, 友達の質問に答えなかったりしている。</li> <li>友達の出題するクイズに参加していない。</li> </ul>		
2	<p>身の回りの人や物事について, 口頭で質問したり, 紹介したりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>前時と別のグループ分けをして, 2 回目の有名人当てクイズを行う。</li> </ul>	アの	<p>活動の観察</p> <p>前時に評価していない半分のグループを評価します。併せて, 前時に「努力を要する」状況(C)だった生徒の変容も評価します。前時に「おおむね満足できる」状況(B)であった生徒についても, 向上が見られれば, 評価結果を修正します。</p>
	<p>What time ~? を用いた文の構造を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教科書本文(Part 2)を通して, What time ~? の使い方や応答の仕方について理解する。</li> <li>What time ~? を用いてペアで応答練習する。その際, A L T に質問する場面を想定する。</li> </ul>		
3 ・ 4	<p>What + 名詞 ~? や Which ~, A or B? を用いた文の構造を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教科書本文(Part 3-4)を通して, 身の回りの人や物事について, 口頭で質問したり, 紹介したりすることができる表現をワークシートにまとめる。</li> <li>自分の家族の写真を 1 枚用意し, What + 名詞 ~? や Which ~, A or B? を用いてペアで応答練習する。</li> <li>A L T の紹介ビデオをもう一度見て, 質問したいことをペアで出し合い, 口頭練習する。</li> </ul>	エの エの	<p>後日ペーパーテスト</p> <p>教科書本文の What + 名詞 ~? や Which ~, A or B? の形・意味・用法を区別して理解しているかどうかを観察して, 指導を行います。記録に残す評価は単元終了後のペーパーテストで行います。</p>

5	<p>A L Tの中学校時の学校生活や放課後の過ごし方について，質問することができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ A L Tの中学校時の学校生活や放課後の過ごし方について，A L Tに口頭で制限時間の1分以内できるだけたくさん質問する。</li> <li>・ A L Tの紹介ビデオをもう一度見て，質問したいことをペアで出し合い，口頭練習する。</li> </ul>	<p>アの</p> <p>エの</p> <p>エの</p> <p>エの</p>	<p>活動の観察</p> <p>躊躇せず発話している様子を評価します。特に1・2時間目に「努力を要する」状況(C)であった生徒を中心に評価します。</p> <p>後日ペーパーテスト</p> <p>教科書本文の Who, What + 名詞 ~?, Which ~, A or B?の形・意味・用法を区別して理解しているかどうかをワークシートで見取り,次時の指導に生かします。</p>				
6	<p>身の回りの人や物事について，口頭で質問したり，紹介したりすることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 用意されている写真(1・2時間目に生徒が作成した有名人当てクイズで使用済み)から1枚を選び，教師に次のような4つの質問を1分以内にする。質問を考える時間は前の生徒が質問を教師に行っている待ち時間に行う。</li> <li>・ 活動終了後に，質問した内容をまとめ，ワークシートにその人の紹介文に書き直す。</li> </ul>	イの	<p>活動の観察</p> <p>口頭で質問する力を見取ります。疑問詞を正しく用いて2つ以上の質問ができていれば「おおむね達成できる」状況(B)と判断します。4つの質問ができていれば正確な発話について，「十分満足できる」状況(A)と判断します。「努力を要する」状況(C)については適切な指導を行います。</p>				
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;">その人物は誰なのかを尋ねる。</td> <td style="width: 50%;">職業は何かを尋ねる。</td> </tr> <tr> <td>好きなスポーツや教科は何かを尋ねる。</td> <td>( )と( )ではどちらが好みかを尋ねる。</td> </tr> </table>				その人物は誰なのかを尋ねる。	職業は何かを尋ねる。	好きなスポーツや教科は何かを尋ねる。	( )と( )ではどちらが好みかを尋ねる。
その人物は誰なのかを尋ねる。	職業は何かを尋ねる。						
好きなスポーツや教科は何かを尋ねる。	( )と( )ではどちらが好みかを尋ねる。						
後日	<p>ペーパーテスト</p> <p>場面を与えて適当な表現を書く問題</p>	<p>エの</p> <p>エの</p> <p>エの</p>	<p>ペーパーテスト</p> <p>Which が文頭にあること,be 動詞が疑問文の語順になっていることを見取ります。並べ替えたときに,which の w が大文字になっているかは,指導はしますが,評価の対象としないようにします。</p>				
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;"> <p>エの のペーパーテストの例1</p> <p>次の対話文を完成させるために,[ ]内の語を正しく並べ替えなさい。</p> <p>A: [ your / favorite / is / which ], cola or orange juice?</p> <p>B: I like cola.</p> </td> <td style="width: 50%;"></td> </tr> </table>				<p>エの のペーパーテストの例1</p> <p>次の対話文を完成させるために,[ ]内の語を正しく並べ替えなさい。</p> <p>A: [ your / favorite / is / which ], cola or orange juice?</p> <p>B: I like cola.</p>			
<p>エの のペーパーテストの例1</p> <p>次の対話文を完成させるために,[ ]内の語を正しく並べ替えなさい。</p> <p>A: [ your / favorite / is / which ], cola or orange juice?</p> <p>B: I like cola.</p>							

ここでは，評価機会が複数回行われる「ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「エ 言語や文化についての知識・理解」についての評価の進め方について紹介します。

### 「ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度」

グループ活動やA L Tとの対話で，A L Tや自分が知らない友達のことを質問する表現を使う練習や実際に質問する活動において，すすんで英語を用いて話しているかどうかを観察して評価します。

評価機会を増やすために，有名人当てクイズは1・2時間目を通して行うようにしています。5時間目の「活動の観察」と併せて，間違ふことを恐れずに質問している積極的な生徒の態度を観察し，記録に残す評価を行います。限られた時間の中で全ての生徒を評価することは難しいので，あらかじめ評価する生徒を決めておくなどの工夫をすることなどして無理なく確実に評価できるようにすることが大切です。

## 「エ 言語や文化についての知識・理解」

この観点については、十分身に付いた段階で評価を行います。例えば、1時間目の疑問詞 who の理解については、この時間内に行う評価で十分理解できていたとしても、定着が図れているかどうかを判断することは難しいでしょう。1時間目は「後日ペーパーテスト」としておいて、疑問詞 who がどの程度理解されているかどうかということについては、ワークシートやワークブック等の記述で把握する程度にしておきます。後日、定期テストなどで「ペーパーテスト」を実施し、記録に残す評価を行います。この単元では、複数の疑問詞を指導し、評価することになりますので、前述のエの のペーパーテスト例1のような問題を他のエの や でも同じような形式で行い、5問中3問が正答であれば「おおむね満足できる」状況(B)とするなどの目安を設定しておくことなどが考えられます。

### エの のペーパーテストの例2

次のような場合に、相手に何とたずねますか。英語で書きなさい。

友達にコーラ(cola)とオレンジジュース(orange juice)のどちらが好きか聞きたいとき

上記の例2は、生徒が記述する単語の数が多いこととカンマ以降の or の使用も書かせることで、例1よりも難しくなりますが、あくまでも「構造を理解しているかどうか」を評価します。コーラやオレンジジュースなどの語彙を問うものではないので、これらについては始めから示しておくといよいでしょう。

「おおむね満足できる」状況(B)としては、例えば、次のような解答が考えられます。

(解答例) Which is favorite cola or orange juice?

「Which + 疑問詞の語順」で書くことができますので、文構造を理解しているとして、「おおむね満足できる」状況(B)と判断します。your やカンマ(,)が脱落している誤りについての指導は行いますが、ここでの評価の対象にはしないこととします。

なお、ペーパーテストは、評価方法の一つとして有効ですが、ペーパーテストにおいて得られる結果が、目標に準拠した評価における学習状況の全てを表すものではないことについては、改めて認識しておく必要があります。

## 中学校外国語科における学習評価事例 2

一単位時間の中で、指導に生かす評価(形成的評価)と通知表や指導要録の観点別評価の判断のために記録に残す評価(総括的評価)の違いが分かる事例

事例2の単元は、「ガリバー旅行記」についての対話で、ものの存在を表す表現や時や条件を示す節の用法を正しく身に付け、運用する力を育てる単元です。この単元は6時間で構成しており、単元末には「外国人に佐賀を紹介する英文を書いてみよう。」という言語活動を設定しています。“If you come to Saga, you can go to Yoshinogari Historical Park.”などの紹介文を書くことをねらいとしています。

第1時は、新出文法のthere is(are)を用いた自己表現活動を通して文構造を理解することと教科書本文をペアで適切に音読することをねらいとし、第2時(本時)は、新出文法のwhenを用いた自己表現活動を通して、辞書を活用して積極的に書くことと、教科書の本文をペアで適切に音読することをねらいとしています。音読の評価場面を2回設定することで、指導の充実を図り、全員を評価することが可能となるように工夫しています。第1時はペアで「おおむね達成できる」状況(B)かどうかを判断し、「努力を要する」状況(C)については適切な指導を行います。第2時は「努力を要する」状況(C)にあった生徒を中心に評価を行い、全員が「おおむね達成できる」状況(B)以上の評価になるように適切な指導を行います。

# 1 単元名 Gulliver's Travels (Sunshine English course) 第2学年「書くこと」

## 2 単元の目標

- (1) 自分のふるさとを紹介する英文を書く。
- (2) 辞書を活用するなどして書く。
- (3) there is(are)及び接続詞 when, if を用いた文の構造を理解する。

## 3 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての 知識・理解
辞書を活用するなどして書 いている。	自分のふるさとを紹介する 英文を書くことができる。 意味内容にふさわしくペア で音読することができる。	/	there is(are)を用いた文の 構造を理解している。 接続詞 when を用いた文の構 造を理解している。 接続詞 if を用いた文の構造 を理解している。

## 4 本時の目標 (第2時)

英語で書かれた内容が表現されるように適切に音読する。

## 5 本時に位置付けた評価規準

ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての 知識・理解
辞書などを活用するなどし て積極的に書いている。	意味内容にふさわしくペア で音読することができる。	/	接続詞 when を用いた文の構 造を理解している。

## 6 本時の指導と評価の計画

ねらい・学習活動	評価 規準	評価方法( )とその進め方
<p>辞書を用いて、積極的に書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・接続詞 when を用いた文の構造を知 る。</li> <li>・接続詞 when を用いて、自分の歴史 についてワークシートに書く。</li> <li>・グループ内で書いた英文を発表す る。</li> </ul> <p>【生徒が書いた英作文例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・When I was six, I wanted to be a fire fighter.</li> <li>・When I was ten, I went to Italy with my family.</li> </ul>	アの エの	<p>観察, ワークシート 後日ペーパーテスト</p> <p>アの に関しては, when を用いて, 辞書などを用いて積極 的に英文を書いたり, たくさんの英文を書こうとしたりす る態度を評価します。単純に辞書を活用しているかどうか をみるのではなく, 積極的な姿が見られる生徒を評価しま す。また, ワークシートに書いた英文について, 積極的な 態度を英文の量でも評価することができます。上記2点に ついて全員が1文以上書けるように机間指導を行い, グル ープ内で発表をさせますが, エの に関しては, 文法的な 指導は初出であるため, 誤りは次時の授業で指導を行い, 記録に残す評価については単元終了後にペーパーテスト で評価します。</p>

<p>英語で書かれた内容が表現されるように適切に音読する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本文を読む前に、挿絵から内容を推測する。</li> <li>・本文を黙読し、大まかな内容を読み取る。</li> <li>・単語等の意味や発音を確認した後で、リピート、バズ・リーディング、ペア・リーディングをする。</li> <li>・「各文で最も強く読むところ」「最も間を空けて読むところ」「25秒以内」を意識し、教師の前で発表する。</li> </ul>	<p>イの</p>	<p>活動の観察</p> <p>準備ができたペアから教師の前で音読を行わせませす。第1時でクラスのおおよそ半分のペアを評価していますので、本時は残り半分及び前時に「努力を要する」状況(C)の生徒を中心に評価します。</p> <p>音読の機会を重ねていることから、前時に評価した生徒より習熟が進んでいることは考慮しておく必要があると思います。したがって、前時に「努力を要する」状況(C)と評価した生徒には、再度、音読の機会を与えることや、前時に「おおむね達成できる」状況(B)と評価した生徒についても、可能な限り、再度音読する機会を与え、向上が見られる場合は、評価結果を修正するなどの配慮が必要です。</p> <p>1分間に150語を読む速度を目安にすると、教科書本文が58語あるので、ペアで25秒以内を目安に発表を終えることを伝えますが、今回は英語で書かれた内容を感情豊かに表現することが目標ですから、25秒を超えてもマイナスの評価は行いません。</p> <p>「各文で最も強く読むところ」の評価については、例えば、13文の強勢のうち、半分以上を正しく読んでいれば「おおむね達成できる」状況(B)と判断するなどが考えられます。また、「最も間を空けて読むところ」については、はっきりと分かるように読むことができているならば(B)と評価します。この2つの評価結果を総合して、イの の評価とします。</p>
--	-----------	--

## 中学校外国語科における学習評価の進め方Q & A

Q 1単位時間に1回または2回程度評価を行えばよいのでしょうか。

A これまでのように、1単位時間の中で4つの観点全てについて評価規準を設定し、その全てを評価し学習指導の改善に生かしていくことは、評価を行うこと自体が大きな負担となります。教師が無理なく生徒の学習状況を的確に評価できるように、これからの評価では、通知表や指導要録の観点別評価の判断のために記録に残す評価(総括的評価)は1単位時間に1回または2回程度行うような指導と評価の計画が国立教育政策研究所からも示されています。したがって、1単位時間に1回または2回程度を適切に位置付け、個々の生徒について、確実に評価を行うことが求められていると考えてください。その際に、全ての生徒が少なくとも、「おおむね達成できる」状況(B)以上であると判断できるように、それまでの形成的評価とそれに基づく適切な指導を行っていくことは従来までと変更ありません。

Q 観点ごとの総括は、いつ行えばよいのでしょうか。

A 観点ごとの総括の時期については、単元ごとに総括する方法と、学期ごとなどのある程度長い期間で一つに統括する方法が考えられます。例えば、事例1の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の評価の場合、この単元内の2回の評価場面で評価した結果を総括して、単元としての結果を残すことと、同じ学期内の同じ観点で評価した結果を全て総括して、学期の結果として残す場合などが考えられます。総括の仕方については様々な考え方や方法がありますので、各学校の工夫が望まれます。

Q 年間を見通した評価の重点化や系統化はどのように行えばよいのでしょうか。

A 年間の指導計画を基に、年間の評価計画を年度当初に作成しておく効果的です。例えば、次の計画表のように、各単元で全ての観点について評価するような計画ではなく、いくつかの観点に絞って評価するなどの重点化が必要です。同時に年間を通じてバランスよく評価されるように系統的な計画が望ましいです。

第1学年の評価計画

(本事例)

単元			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
関心・意欲・態度	聞くこと	言語活動への取組											
		コミュニケーションへの継続											
	話すこと	言語活動への取組											
		コミュニケーションへの継続											
	読むこと	言語活動への取組											
		コミュニケーションへの継続											
	書くこと	言語活動への取組											
		コミュニケーションへの継続											
表現の能力	話すこと	正確な発話											
		適切な発話											
	読むこと	正確な音読											
		適切な音読											
	書くこと	正確な筆記											
		適切な筆記											
理解の能力	聞くこと	正確な聞き取り											
		適切な聞き取り											
	読むこと	正確な読み取り											
		適切な読み取り											
知識理解	言語についての知識		L	W		S			W	L	S	W	
	文化についての理解				R								W

各単元において評価の対象とするものに や を付しています。 は重点的に指導するものです。

またLは「聞くこと」、Sは「話すこと」、Rは「読むこと」、Wは「書くこと」をそれぞれ示しています。

Q ペーパーテストで英作文を書かせるときに、「表現の能力」なのか「言語や文化についての知識・理解」なのか迷うときがあります。どのように考えて評価規準を設定すればよいでしょうか。

A 「言語や文化についての知識・理解」については、質問に対する答えが一つしかない場合、「表現の能力」については答えが生徒の数だけ存在する場合と考えると評価規準を設定してください。具体的に3つの事例を紹介します。

(1) 次のような場合、英語でどのように答えますか。“What time is it now?”

教室にいる生徒は全て同じ答えをするので「知識・理解」を評価する問題

(2) 次のような場合、英語で何と相手にたずねますか。

・どこで泳ぐ(swim)つもりか聞きたいとき

教室にいる生徒は全て同じ答えなので「知識・理解」を評価する問題

ここでは、where(場所を表す疑問詞)が文頭に置かれ(文構造)、その後は未来を表す表現と疑問文の語順についての知識があるかを評価しています。

(3) “What season do you like the best? And why?”

生徒によって多様な答えが出るので「表現」を評価する問題

このように、問題形式も設定の仕方でも評価する観点が大きく異なります。評価方法が適切であるかを常に心掛けて定期テストの問題を作成する必要があります。

Q ペーパーテストで教科書の本文を出題することに問題はありますか。

A 留意しなければならないのは、授業で一度読み取ったことがある英文は、ペーパーテストでは「暗記」の能力を問うことになり、「理解」の能力を問うとは言い難いということです。そこで、教科書とは全く異なる英文で同程度の英文を出題する方法や、教科書本文が対話文になっていればそれを説明文に書き換えるなどの工夫が必要です。作成した問題をA L Tにチェックしてもらうなどの工夫をすることによって、より質の高いものになるでしょう。

この手引きは、国立教育政策研究所で公開されている「評価規準等の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(中学校)などを参考にして、作成しています。以下のURLをご参照ください。

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>